



離見沢同人誌即売会、

爆催!!!

07th Expansion





■麗見沢同人誌即売会、開催！！

【お嬢】「魅音、詩音、お前たちは、この村で同人誌即売会をするんね」

【魅音・詩音】「はあああああああ？？！！」

お嬢の口から同人誌即売会という言葉が飛び出すなんて……！

魅音と詩音は、とんでもない天変地異が起こる前触れではないかと思わず身震えてしまう。

【茜】「何だい。若いくせに知らないのかい？ 同人誌即売会」

【魅音】「いやいやいや、知ってるか知らないかで言ったら、もちろん知ってはいるけどさ……！」

【詩音】「何だって突然、麗見沢でそれをやるうなんて話になったんです？！」

【茜】「婆様と話して決めたのさ。麗見沢の未来の為には、若い人たちをどんどん招かなくちゃいけないって」

【お嬢】「主一ひとりで、この村をこんなにも変えてくれたんよ。都合の若者がもっと来てくれちよあん、村があんじょうあんじょう若返るに違いないんてな」

【茜】「先日ねえ。婆様と前原夫妻でお話をする機会があってねえ。そこで、若者をもっと呼び込むことは出来ないかって言ったら、同人誌即売会っていうのを提案してくれたのさ」

【詩音】「他所からの移住者を募りたいなら、他にやり方があると思いますけど……」

【お嬢】「ああん、そういうのは好っきゃないんね」

【西】「都合者って、都合暮らしに疲れたから田舎ならのんびり暮らせるに違いないとか、そういう言い方えて来る道中もいるだろ？」

【睦音】「ああ、そーゆうのあるかもしれないねえ。都会の人って、田舎はのどかでいいねえとか一方的に決めつけて、無自覚に差別してくるところもあるよね」

【詩音】「ぶっちゃけ、都合暮らし程度が務まらないような人に、のどかでなんて言われるほど、難見沢は甘くありませんから」

【茜】「そういうことさ。村は、元気な若者を求めてるんだ。田舎ならのんびり暮らせそうだからなんていうやつなヤツじゃなく、エネルギッシュで創造的な若者を求めてるのさ」

【睦音】「って話をまちゃんのお父さんにしたら、同人誌即売会がお勧めだ、って……？」

【茜】「ああ、そうさね！ 同人誌ってのは、自分で原稿を書いて、自分で印刷所と交渉して印刷して、それをダンボールに詰めて運び込んで、手に取って読んでもらえるよう、自分でアピールしてかなきゃいけないんだろ？ 大した手間さ！」それが楽しくって、どんどん盛り上がりまうっていうんだろ？」

【睦音】「確かにねえ。情熱を形にして生み出して発表しようっていうのは、すっごいエネルギッシュなことだよな」

【お嬢】「そういう若者を難見沢に呼びたいんよ。そして、主一みたいにここを気に入って、住んでみたいと思ってくれる人がありゃあんた、すったらんな話やんねなあ、ひゃっひゃっひゃ！」

難見沢において、お嬢がこうと決めたなら、話は早い。そして必ず実現する。

この風光明媚な難見沢に、同人誌即売会がやってくるのだ。

【睦音】「っていうのが同人誌で、それをみんなで持ち寄って即売会をやらうっていうワケ。ここまででわからない人～」

【レナ】「レナはわかったかな！ 自分の好きを本の形にして発表するなんて素敵な、かな！」

【圭一】「別に本の形にしなきゃいけないワケでもねえんだぜ。どんな形だろうと、自分の好きを、同じものが好きな人たちと共有できればいいんだ」

【沙都子】「それにしても、わざわざイベントに来てまで、何かに負けたワケでもないのにコスプレをする万々がいるなんて、にわかには信じられませんわ？」

【梨花】「沙都子はコスプレを罰ゲームだと誤解しているのです。コスプレもまた、自分と衣装を組み合わせた立派な創作発表なのです。にばー☆」

【詩音】「で、ここにこうして即売メンバーを集めた、ってことは、ただの即売会にする気はないってことですよ？ お姉？」

【魅音】「まーねー☆ 我が部あるところ、常に部活あり、勝負あり！ セッカクのイベントだからね！ みんなで作品を作って、それぞれに発表する！」

【圭一】「なるほどな！ それでどれだけの数が売れたかで勝負するってフケカ！」

【レナ】「うーん、楽しむことが一番であって、数を競うのはちょっと違う気がするかな、かな……？」

【魅音】「楽しむのが一番に決まってるって！ その極限のさらに彼方に、我が部はさらに勝負をするわけさあ！」

【梨花】「みー、魅音が何を言ってるかさっぱりなのですが、負けたら大変なことになりそうなのだけはわかりますです」

【沙都子】「部長の魅音さんの号令ですもの。私たちには断る術なんてありませんわね」

【詩音】「ええ、そういうことです。思いっきり楽しんで。その上でさらに、売り上げ部数で勝負しましょう！」

【レナ】「うんっ、そういうことなら、わかったかな！ レナも張り切るよー、はうー！！」

【梨花】「ボクと沙都子はどうしますですか？ 同じ家だから、何を作ってるかお互いバレバレなのですよ？」

【沙都子】「ああ、私は梨花とも競い合いたいのですわよ？ 大丈夫、梨花のを勝手に見たりはしませんし、私も自分の原稿は北条家で描きましてよ」

【圭一】「やっぱ、漫画とカンプがないといけないうんだよねあ。……俺、絵とかうまいわけじゃないしなあ」

【レナ】「そんなことないよ、圭一くん。絵がうまいへたじゃなくて、自分の楽しいって気持ちが必要られてるかどうかが大事だと思うな！」

【魅音】「まあ、意外とそういうのってあるよね。さっぱりわからない趣味の話であっても、すっごく楽しそうに語ってると、意味不明でも楽しそうな気持ちだけは伝わってくるし」

【詩音】「確かに。大事なのは楽しさを共感して欲しいって気持ちなんですよ。価値観の押し付けやマウントとは違いますから」

【レナ】「詩いちゃんの言う通りだね。そして、それを伝える方法は何も漫画だけに限らないと思うよ。文字でもカタチでも。どんな方法でもいいと思うかな」

【沙都子】「まあ、それでも同人誌の華はやはり、漫画ですもの！ 私はすっごい面白い漫画を描いて差し上げてよ！」

【梨花】「沙都子が漫画を描いたなんて初耳なのです」

【沙都子】「私こそ！ 梨花の彼滅的な絵画センスから、どんな傑作が生まれるか大いに楽しみでしてよ？ を～っほっほっほ！」

【梨花】「み？－なんだア？－てめエ……。幼稚園児並みの画力の沙都子に言われるのは心外だわ……？」

てっきりペアで合同誌を作るかと思われていた二人は、何だかバチバチと火花を散らし合っている。

【主一】「この二人って、そんなに絵心がないのか？」

【レナ】「うーん、レナはよく知らないけど、漫画を描けるような能力があるのは、魅いちゃんぐらいじゃないかなあ。……主一くんは漫画とか、描いたことある？」

【主一】「んー……。小学校の頃に、あるにはあるんだが」

学級新聞が何かに漫画を描くことになって、まあ、小学生なりに楽しく描いていたのだが。

どういわけかそれを見た親父とお袋に、いきなりガン詰めされて、あーだこーだと熱血指導されて困惑し、以来、親に自分の絵を見せるのが難いになったような記憶が……。

親がどういう仕事をしているのか、いつもはぐらかすので詳しくはわからないが、……多分、絵とか漫画とかを描く仕事なのだろう。いや、雑誌の編集者とか？　なので、我が子が描いた漫画を見て、つい興奮してガチな指導をしてしまったというところなのだろうが……。

【詩音】「レナさんは絵とかって描けるんですか？」

【レナ】「うーん……。メモの隅っこに、ちょっぴりイラストを描いたことがあるくらいで、漫画なんか描いたことないから、困ってるかな……。でも、私の好きって気持ちや楽しいって気持ちが伝わるように色々考えるのも、きっと楽しいって思うから。色々がんばってみるつもりかな」

【主一】「詩音が何を描くのが楽しみだな！」

【詩音】「私は参加しないかもです。皆さん、結構本気で描くみたいですし。今回は純粋にお客さん側に戻った方が楽しそうだなあって思っています。……それに、私が本気で参加したら、お姉の見せ場がなくなっちゃいますからねえ。くすくすくす」

【惣音】「それでは諸君！　勝負開始だよッ。鑑見沢同人誌即売会に素直らしき作品を持ち寄って決着をつけようッ！！」

【主一】「自分の好きを、描けばいいとはいってもなあ……………」

主一は腕組をして悩みながら自宅の前まで帰ってくる。

自分で原稿を描いて、自分で本にするなんて、今までに一度もやったことがない。



騒音に相対するのガー音だが、すでに勝負が始まってしまっている以上、騒音はライバルだ。

敵に教えてもらいに行くのは、何か違う気がする……。

【伊知郎】「帰ったな、主一！ 話はすでに知っているぞッ！！」

【主一】「うわあ！！ と、父さん……ッ？！？！」

【伊知郎】「友達みんなで個人誌を作り持ち寄る！ そして頒布し、自分の想いを世の中に広げていく！！ 素晴らしい世界だぞ！ ようこそ、主一！ お前がこの世界に来る日を待っていたぞ！！ ウハハハハハ！！！」

そう言い、主一ババは主一を、普段は立入禁止にしている自身のアトリエに誘う。

そこには……、絵に描いたような修羅場モード漫画家の書斎の光景が広がっていた……！！

【主一】「こ、これは……？！ まるで……漫画家……？？ 父さんって画家じゃなかったの……？」

【伊知郎】「父さんは内なる感情の表現者に過ぎない！ その表現方法が何かが問題じゃないんだ！ しかし、父さんの時代にはまだ、表現方法には常識があったのだ！ 漫画は有害！ 馬鹿になる！ 今でこそ漫画の神と呼ばれているような歴史的大家先生方が、どれだけ世間の無理解に苦戦されてきたか……！ だから私は、家族の生活を守る為に画家と名乗って来たのだ！ だが、今こそ、その偽りのヴェールを脱ごう！ 漫画もまた、父さんの持つ無数の表現方法のひとつだと、今こそ我が息子に明かそうッ！！ さあ、主一！！ 教えを乞うがいいッ。お前が最高の同人誌を描けるように、この私ッ、鉄板型サークル、Front Fieldの前漫画伯がお前にマンツーマンで技の全てを教えてやるッ！！！」

この熱量をお題にも語ったに違いない……。

まあ確かに、エネルギーで創造的なパワーを感じるかもしれないが……。

しかし、実の息子が言うのも何だが、少し付いて行きかねる暑苦しさも感じてしまう……。

【主一】「いや、……待てよ、前原主一。クールになれ」

何となく自分の親の熱量に怪訝になってしまっているが、……現状では選りに給命ではないか？

俺は部活メンバーとして、すでに同人誌を描いて持ち寄り部会で勝負するという挑戦を受けている。

……そういえば、罰ゲームが何かは聞いてない。しかし魅音のことだ。同人誌即売会という真空間でどのような辱めを受けさせられるか、想像しただけで身の毛がよだつ。

いや、そうじゃないそうじゃない！

部活は負けをイメージした時点でもう負けている！ 勝つんだ。勝ちに行くんだっ！！

それに、俺にだって内なる感情の爆発はある。それをどう表現するかは決まっていなかった。しかし今四、部活によって、漫画を描くという形で表現することに挑戦することが出来る……！

【圭一】「そうさ……。俺は萌えのバトスと、熱き魂の伝道者、Kッ！！ 親父ッ、俺に漫画の描き方を教えてくれ！！！」

【伊知郎】「その一言を待っていたぞ、マイサン！！！！ 俺の培った経験、技、知識ッ、全てお前に伝授してくれようぞああああ！！」

【魅音】「お姉、主ちゃんはどうも、お父さんに漫画の描き方を特訓してもらってるみたいですよ～？」

【魅音】「だろ～ね～。主ちゃんのお父さん、その道では伝説的な人らしいからね」

【詩音】「いくら田舎とはいえ、アングラ漫画の売り上げだけであんな立派なお家を建てちゃう人ですからね。お師もうかうかしてられないんじゃないですか？」

【魅音】「そうだねえ、うかうかしてられないねえ……。くっくくくっく！！」

そう言いながら繰り返す魅音。そこには描き掛けの原稿用紙が。プロ顔負けの見事な漫画が描かれているのだ。

【詩音】「おー、さっすがあ。お姉の秘密の趣味が、ついに日の目を見る時が来たんですね。読ませてもらってもいいですか？」

【魅音】「いーけど、つまんない茶々はやめてよー。おじさん、真面目に描いてんだから」

【詩音】「わかってますって。どれどれ………」

最初は冷やかす気も残ばくかあった詩音だが、描き終えた原稿と、この後の展開のネームを読み進める内に、無口になっていく。

【魅音】「茶々は入れんなとは言ったけど、無言で読まれるのも何か

恥ずかしいよ。何か言ってよー」

【詩音】「……これ、即売会に出す同人誌の漫画なんですよ〜?」

【魅音】「もちろん」

【詩音】「このまま封筒に入れて、どこかの新人賞に送ってもいいしべルです。というか夢中になります。面白いですっ」

【魅音】「っしゃ! ありがとう、詩音! その一言でおじさん、もう一息頑張れちゃうよ!」

【詩音】「キングオブガサツのはずのお姉が弱く、渾身のラブロマンス。……まあ、誰もこれに勝てるものは描けないでしょうねえ。つくづくお姉も容赦のない人です」

【魅音】「くっくく。他のみんなはどんなのを作ってくるかなあ……?」

【詩音】「圭ちゃんが読めませんね。あの人、こういう時はわけのわからない洞察力を出しますから」

【魅音】「だねえ。伝説の同人作家の父から手解きを受けて、圭ちゃんの本気の情熱を爆発させたら……、私と互角に並ぶこともあるかもしれないよ」

【詩音】「レナさんはきっと、ゴミ山から集めたかいいいモノを羅列するんじゃないでしょうか?」

【魅音】「……そうなら問題ないんだけどねえ。あの手、たまにすごく賢いからなあ」

【詩音】「自分の好きが、誰にとっても好きとは限らないってこと、わかってそうですよ〜」

【魅音】「同人ってのは、自分の好きを自由に語る事が許される場だけれど、……受け手に興味を持ってもらえなかったら、部数勝負には勝てない」

【詩音】「何気に一番読めない相手ですね。レナさんは勝ちも負けも両極端なところがありますから」

【魅音】「まあ、油断はしないけどさ。それでも私の勝ちは動かない、……で、あと残るは梨花ちゃんと沙都子だけど。まあ、あの二人は絵は全然だからねえ、くっくく」

【詩音】「大方、御目コスプレの萌え落として部数を稼ぐくらいしか手が無いでしょうねえ」

【魅音】「くっくくくく、ひゃっひゃっひゃ!!」

【沙都子】「……最初からわかりきっていたことですわ、梨花」

【梨花】「あー。……ボクたちに漫画は、荷が重すぎるのです」

【沙都子】「前段から、ノートの隅にお絵描きをしましたから、……多少は描けてるつもりでいましたけれど」

【梨花】「ちょこっと小さく描くイラストと漫画を描くことでは、まったくの別次元なのです……」

【沙都子】「となると、……取れる手はひとつしかないフケでございませうけれど……」

【梨花】「沙都子とお揃いで猫耳を付けて、可愛い衣装でみ〜み〜にばいばいして、その手の大きなお友達を萌え落として歸ってもらうのですよ」にば〜……………」

【沙都子】「………………。もう読み切られてる手でしてよ。仮にそれで勝てたとしても、虚しさしか残りませんわ」

【梨花】「ボクだって……、実力で勝てるなら勝ちたいのですよ。でも、今から死ぬ気で練習しても、到底、間に合うとは思えないのです」

【沙都子】「梨花。……これ、部活ですよ？　していい努力に、限界はありませんのよ？　どうせ負けるとわかっていて努力をしないなんて、部活魂ではありませんでしてよ？」

【梨花】「……なら、絶対に勝てるというところまで、練習をしないのです。……どうせやるなら、……勝ちたいのですよ」

【沙都子】「ええ、そうですわ！」　やりますわよ、梨花ッ。限界まで、いえッ、限界を超えて描いて描いて描きまくって！！　本気の漫画力でびっちぎりに勝ってやるんですわよ！！」

【レナ】「お父さん。興味を持ってない相手に訴える伝え方、って、何かな」

唐突な質問に、レナの父親はびっくりする。

だけれども、その珍しい質問に父親の機はわずかに輝きを取り戻す。

【レナ】「お父さんって、営業の仕事をやってたんだよね？　そういうの、詳しいかなって思ってた」

【父親】「プレゼンのことかい？　……もう営業の仕事は辞めてだいぶになるからな。……今さら、教えられるようなことは何もないよ……」

【レナ】「……お母さんは昔、言ってたよ。……どんな素敵な服を作っても、お店に置いてもらえなければお客さんに見てもらうことも出来ないって。……そして、お客さんのニーズとお店の人のセンスが、必ずしも一致してるわけじゃないって。……お父さんは、そういう人たちに魅力を与える天才だったって、言ってたんだよ」

【父親】「……………そうか」

【レナ】「お母さんは馬鹿だね。何でそれを私に言って、お父さんに

は言わなかったんだろ。……でも、魅力を伝えることの天才って
言ってたのは、一度や二度じゃないんだよ」

【父親】「そうか。話してくれてありがとうな。……それで礼奈は、
何をしたいんだい？ お父さんに出来ることなら協力してあげるよ」

【レナ】「これ。……カぁいいと、思う？ これは？ それは？
こんなのとかは？」

次々とレナ秘蔵のかぁいい宝物が並ぶが、父親の表情は曖昧な苦笑
いを浮かべてしまうだけだ。

全然可愛いと思えないけれど、娘のお気に入りだから同感してあげ
たい。……でも娘は嘘が大嫌いだからなあ、書えることがタダ洩
れになっている表情だ。

【レナ】「うん。わかってる。私のかぁいいは、他の人たちには理解
し難いものだってわかってるの。だからね？ それを伝えたいの！
プレゼンテーションしたいの！ 全然、興味の無い人に、私の感じて
るかぁいい気持ちの高まりを理解してもらいたいの！ それには、ど
んな形で資料を作ればいいのかって！」

【父親】「……それにはまず、礼奈の感じている可愛さや魅力を書き
出して整理し、分析することから始めるんだ。ただただ、可愛い可愛
いの言葉だけでは相手には伝わらない。何故どう可愛いのか、それを
訴えなきゃ、相手の心に具体的にあなたの気持ちが浮かび上がらない
ぞ。……まず、ヒヤリングをしよう。お父さんが聞き役に回る。今か
ら礼奈に、そのかぁいいモノの魅力を尋ねるから、それに答えるん
だ。お父さんはそれを要約していく。そうやって、礼奈の“好き”
が、どうして“好き”なのか分析し、伝え方の最適解を見つけ出
そう。お父さんはちょっと、筆記用具を持ってくる」

【レナ】「私はお茶を淹れるわっ」

【主一】「どっ、どうだ親父いいいい！！ これでもまだヘタクソか
あぁあぁ！！！」

【伊知郎】「まだまだあぁあぁあ！！ 俺の息子ならこの程度ではな
いはずッ！ お前の愛はッ、夢はッ、妄想はそんなものかあぁあ！！
俺の絵を見てみるあぁあぁあッ！！」

【主一】「くはあぁあッ？！？！ カッ、かわええ……！！ 紙
とペンで、どうしてこんなにもみよみよなお胸が揺けるんだ
あぁあ！！」

【藍子】「……うーん。主一？ バストのトップの位置が少しおかし
いわ？ あとお父さんの描く女の子のお尻はちょっと誇張が過ぎる
わね。これだとお尻の穴の位置が、ここいらってことになってるすが
じおかしいわ？」



【主一】「ぐほあああッ？！ か、母さん、ノックしてから入ってきてくれえええッ！！」

【伊知郎】「……というか、女の子のセクシーイラストにリアル女性からダメ出しされると、めっちゃ恥ずかしいんだよね……」

【主一】「お前さんにダメ出しされる俺の方がよあっと恥ずかしいわあああッ！！！！」

【飯子】「はいはい、描いて描いて描きまくって！ 栄養ドリンクも買ってきておいたわよ。これ飲まないとお腹まらないもんね。修羅場」

【伊知郎】「行くぞ、主一！！ 栄養ドリンク一気飲みで修羅場モードに突入だ！ 締め切りまであとわずかだよ！！」

【主一】「おおッ！！ 俺の青い唇の飛び散るエキスをインク代わりに、咳で原稿用紙、削り込んでやるぜええええええッ！！！！」

【時音】「ここベタ？ トーン？ 番号、指定してくれないとわかりません」

【魅音】「だーッ、そんなのそっちで判断してよッ。こっちは今が一番重要なシーンなんだよああッ！！」

【時音】「わあ〜 二人の唇が近付いて……一番、いい感じなシーンですね！ ところで、主人公の名前が蜜ちゃんて、ヒロインの名前が美いちゃんなんですが、さすがにそれはバレバレが過ぎません？」

【魅音】「うっせええッ、最後には変えるよ、当たり障りのない名前に変えるから！ 原稿中くらいどんな名前つけて夢を見たっていいじゃん、いいでしょッ？！ ふぬああああああああッ！！」

魅音もだいぶ徹夜が経ているようだ。頬にはトーン痕、顔には冷えピタ。机の上には健康ドリンクの空き瓶。一目でわかる修羅場状態だ。

時音は内心、思うのだ。魅音の漫画力ならば、ここまでやらなくても業績は出す。

それでも本気を出し尽くさないと納得できないのが、魅音という人なのだなあ、と。

【時音】「お姉のそういう性分。嫌いじゃないです。……でも、そうならやっぱ、とことんじゃないとダメですね？ セリフ、ちょっと修正しておきますね。お姉がもっと気さくなるように。……二人の名前を、まちゃんと魅いちゃんに直しておきますねー☆」

【魅音】「ッッ、時音ん？！ そそ、それはやや、やり過ぎいいいいいい！！！！」

【時音】「ほらッ、まちゃんとお姉のラブシーンですよ？！ この程度の作画でいいんですか？！！」

【魅音】「いッ、いいわけねええええええええええ、ビリビリビリ

ー！！！！ もっかい描くッ、どうおりゃあああああああッ！！！！」

そして、

ついに、難見沢同人誌即売会の日がやってきた……！！

県外からも参加しているサークルもあるようだ。普段の難見沢にはない熱気に溢れている。

開場時間までに各サークルは自分のスペースの準備をしなくてはならない。

【魅音】「自分の運身の作品を発表するんだからね。スペースも、最高のものにしないとねえ！」

【持音】「サークルスペースを飾り付けるのって、なんか文化祭とかみたいで楽しいですね。ところであ姉、新刊の出来栄えはどうですかあ？」

【魅音】「はい、持音」

ダンボールの中から、魅音の運身の一冊が顔を覗かせる。

薄く表紙は夢と乙女心がいっぱいできらきらに輝いているっ。

【持音】「箔押し、エンボス、UVに小口染め！ もう、盛れるもの全部盛りですね！ こんな豪華なのを1冊500円で出すんですか？！」

【魅音】「別に売り上げ金の勝負じゃないからねえ。あくまで売れた部数で勝負だからねえ！」

【レナ】「うわあ、これ、魅いちゃんの同人誌？！ すっごい……！」

【魅音】「すっごいって言葉は、表紙だけで言ってほしくないね。中を見てから評価してもらおうよ」

【レナ】「これ、魅いちゃんが描いたの？！ すごいなあ！ もう魅いちゃんはいつでもプロデビューできるよあ……！」

【持音】「それ、レナさんの本ですか？ 見たいです！」

【レナ】「魅いちゃんのに比べたら露んじゃうよう。はう～……」

【魅音】「まあまあ。おじさんにちょっと見せてごらん？ ん～？ どれどれ」

【持音】「へえ。レナさんの宝物の紹介本ってわけですね。拝見しますね☆」

【レナ】「はう～……。自分の描いた本を目の前で読まれるのって緊張するよあ……」

【魅音】「くッ、……………これは……………?!」

【時音】「ど、擬人化ですね……。レナさんの宝物が、それをモチーフにした可愛いキャラクターで表現されていますよ」

【魅音】「人は無機物に感情移入するのは難しい。……でも、それに適を磨かせれば話はまったく変わる……。それにしても、……擬人化なんて昭和の時代にはオーバーテクノロジーのはずなのに一体どこで……?!」

【レナ】「お父さんに色々とお教えてもらいながら、レナの楽しいって気持ちをもみんなにも感じてもらえるように、表現方法を色々とお研究したの。そして、レナの宝物に親しみを覚えてもらう方法はないかって言ってくれて。それで、こう、……何? ギン化? ぶっけ? 私の中では、グンタくんもクロボヨ人形も、みんなみんなおしゃべりのできるお友達だから、それを漫画にしてみたの」

【時音】「……絵は確かにまだ未熟なところがありますが……」

【魅音】「この擬人化漫画は……、わかる人間にはかなり刺さるよッ。というか、単純に今日の売り上げ部数だけで言ったら私には及ばないかもしれないけど、……元号が昭和の次や、さらにその次になり、誰もが擬人化作品を理解できる時代になったら……、評価は大化けするだろうね……」

【レナ】「んー……? レナはよくわかんないけど、魅いちゃんには及ばないけど、褒めてもらえる程度の本にはなった、って思っているのかな、かな……?」

【魅音】「うんっ。この作品の価値、ポテンシャル、そして先見性! 私には見えてるよ。レナ、グッジョブ!!」

【時音】「お話も面白いな感じで心が洗われますね。……この話を讀んだら、私もあのゴミの不法投棄現場、次からは宝の山って呼べそうな気がします。レナさん、1冊いくらですか? 買わせてもらいますね」

【沙都子】「をーっほっほっほ! さあさあ、ダークホースの登場でしてよー! 魅音さんもレナさんも、そこそこ頑張られたみたいですね。褒めてさしあげますわ!」

【魅音】「おやおや、まあまあ。私たちの渾身の一作を前に、よくもそんな大口が叩けるもんだよ。私やレナの本を見ても、まだ大口が叩けるが見物だね!」

【沙都子】「ほっほっほ! 残念ですけど、私の顔は梨花だけですのよ? 今日の勝負は、私と梨花の頂点争い! 魅音さんたちは三位決定戦で大いに盛り上がりおそばせですわ? をーっほっほっほ!」

【時音】「へえ? 今日の沙都子はいつになく強気ですね。お姉の本を見て、なおその上で言ってるんですよね?」

【レナ】「え? その胸元に刺さってる本が……、まさか沙都子ちゃんのお作の本なの……?」

【沙都子】「どうぞご覧おそばせ。私の頑張る物語の成果でしてよ?

死ぬ気で努力したでございましてよ？」

【魅音】「え？ どうええええええええええッ？！？！ こっ、これッ、沙都子が描いたの？ う、嘘だああああ……！！！！」

【沙都子】「嘘じゃありませんわ。これが嘘をついている顔に見えまして？」

【レナ】「……う、嘘じゃないね。……沙都子ちゃんはこれを、本当に自分で描いたんだよ……」

【時音】「す、すごい……。っていうか、沙都子が本当にこれを描いたなんて、信じられせんっ！！」

【梨花】「あら、沙都子。……ふっん、なかなか仕上げて来たみたいね」

沙都子の漫画力は凄まじいものだった。というか、直ちに連載が開始できるレベルだ。

それを見てなお、涼し気に余裕をプチかます梨花の登壇に、魅音たちはもうわけがわからない。

【梨花】「さあ、沙都子？ 勝負よ。私の百年分の本気を詰め込んだ一冊を、受け取りなさい」

【沙都子】「ええ。ではいよいよここで、決着を付けてましてよ」

何だか、二人のオーラが違う。というか、部活メンバーの知ってる二人ではない気がする。

二人はどうやら、今日の為に漫画力向上を死ぬ気で努力したらしい。

……死ぬ気で。というか、恐らく、言葉通りの意味で。

【梨花】「フッフ。見事ね、ついにこのレベルまで仕上げて来たのね。でも、私には及ぶかしら？」

【沙都子】「くす。……梨花の漫画もなかなかの出来でしてよ。ほんの10年前までは、左右反対の顔を描くのすら苦労なさっていたというのに」

【レナ】「何だか……。次元が違うよあ……。ほうー……」

【魅音】「う、うん。何だか、同人誌のイベントに本職が紛れ込んだかのような違和感だね……」

【主一】「そんなの大したことじゃないさ！ 魅音の本もレナの本も！ 全然、負けてないぜ！」

【レナ】「主ーくんっ」

【主一】「ここが、商業漫画の新人賞か何かの選考会だってんなら、そりゃ絵がうまいヤツが圧倒的に優れてるってことになるだろうぜ。

……でもな。ここは同人誌即売会っていう、よく似つつも全然違う環境なんだよ。ここじゃ、単に絵がうまいってだけじゃあ、生き残れやしないんだぜ？」

【魅音】「た、……確かにね。商業作品から見たら、まったく劣っているのに、ものすごい人気になっている作品なんて、同人界じゃ珍しくもない」

【詩音】「つまり、同人誌において一番大切なものは、画力じゃない」

【しな】「魂だねっ」

【圭一】「そうさ！ 魂の熱さこそが！ 情熱こそが評価される世界なんだ！！」

梨花と沙都子は、画力や漫画力の向上の為に気の遠くなる時間を費やしてきた。

しかし、長過ぎる時間は魔女には堪えられても、人としての心や情熱は堪えられない。

【沙都子】「……お絵描きの練習ばかりで……。確かに途中から心が疲れてきて……。情熱というものは、置き去りにされていた気がしますわ……」

【梨花】「描き手に情熱も魂もないイラストなんて、……要ウケを狙って、ただおっぱいの大きいマイクロビキニで黒髪長髪の姫カットの恥じらい美少女を表紙に描いたところで……。誰の心にも響かないわ……」

【圭一】「いいや！ それはそれでOKだッ！！！ おっぱいは正義！ 正義はジャスティス！！ つまりこの本はジャスティスだ！！ あ、一部、お願いしまーす」

【魅音】「……すごいいい話をしていると思って聞いてて楽しめたわ……」

【しな】「でも、そこまでいう圭一くんの本、どんなのだらうね。気になるねえ」

【詩音】「あれ？ あそこで手を振ってるの、圭ちゃんのお父さんじゃありませんか？」

準備会の受付スペース前で手を振っていた。

満面の笑み。押してきた台車には、圭一の魂の結晶たる新刊が詰められた印刷所のダンボールが積まれている。

【圭一】「ちょっと行ってくるぜ！！ 俺の渾身のツ、入魂の一冊！！ 見てビビってくれよな！！」

圭一は父親のところへ駆けっていく。



【沙都子】「圭一さんの本も、楽しみですわね」

【梨花】「……きっと、ただ絵を何十年もがんばった程度では到底敵わない。歳が込められてる原稿よ。あの圭一の顔を見ただけで、本なんか見なくてももう、その出来がわかるわ」

【レナ】「でも、情熱はやがんより簡単に、一瞬で湧騰するんだよ。沙都子ちゃんと梨花ちゃんの描いた本にそれがなかったとしても、そんなのすぐになんて込めることが出来るんだから気落ちしないでいいんだよ」

【沙都子】「……レナさんの情熱を、私と梨花が遠慮にしたら、つまり最高ってことではありませんこと？」

【梨花】「確かに。原作、竜宮レナでボクたちが絵を描けば……、合体サークルでベカー☆ なのですよ」

【響音】「くっくく！ こりゃあ、とんでもない強力なサークルが誕生しちゃったねえ」

【詩音】「お姉。……どうするんです？ この勝負。本気で、売れた数で勝敗を決めるつもりですか？」

【響音】「あじさんも、そこまで野暮じゃないよ。……でも、そういう勝負ってことで始めちゃったからねえ……」

【レナ】「何部売れたかじゃなくて、1部でも人の手に渡ったら合格、ってことにしたら……？」

【詩音】「おお、レナさん、それいいじゃないですか。勝ち負けじゃなくて、合格って考え」

【レナ】「それにね。仮に、どうして1部も売れなかったとしても、問題はないんだよ。……だって、参加受付の際に、必ず1部を準備会に提出しなくちゃいけないんだから」

受付スペースの前で、圭一たちがその手続きをしているところだ。

1部でも、人の手に渡ったらOK。

つまり、歳の本を持ち寄っただけで、全員が勝者というわけだ……。

【梨花】「せっかく、あれだけ頑張ったのに、白黒が付かないのは残念ね」

【沙都子】「まあ、きっと。こういう時は圭一さんがオチを付けて下さりますわ」

【圭一】「えええゅー……ッ？！ ！ 販売不許可あああああ？！
んなッ、なぜだあああああ？！」

【伊知郎】「すッ、すまんッ、圭一！！ 父さん、こんな健全なイベントに参加するの久しぶりで、……ついついレッドゾーンをぶっ干切ってしまったあああああ！！」

【時音】「……ナイスオ手です。主ちゃん。あはは」

【魅音】「ってことはー、主ちゃんは準備会にさえ受け取ってもらえなかったんで、罰ゲームってことになるねえ？」

【レナ】「あれ？ 魅いちゃん、あれ見て？」

見ると、サングラスにマスク姿の見るからに不審そうな男が、主一たちと何かやり取りしている。

男は販売不許可のはずの本を一部、受け取ると去っていく。

それを最後礼で見送る主一たち。……どうやら、一部始終を見ていた客のひとりが、補けで1冊を買って行ってくれたようだ。

【梨花】「準備会の許可を得てない本を頒布するのは禁止行為なのです」

【涼都子】「でも、魅音さん？ これで主一さんも、少なくとも最低1部は、人の手に渡ったのを達成しましてよ？」

【魅音】「……厳密には即売会で頒布したわけじゃないからノーカンとしたいところだけど……、ま、いっか！」

【レナ】「主一く～ん！！ よかったね！ 今回は誰も罰ゲームなしだった！」

【主一】「ああ、良かったああああ……！ あの親切なおじさんが買って行ってきて本当に良かったあああ！ あの人が買ってくれなかったら俺は今頃、どんな恥ずかしい罰ゲームの宣告を受けていたことが……」

【時音】「あのお客、何者ですか？ 前原のおじさまのお知り合いですか？」

【伊知郎】「僕のサークルにたまに並んでる人のような気がするなあ。きつと、ファンの人に違いない！」

主一の本を懐にしまった謎の男は外へ出る。するとそこに、黒い車がやってきて、後部席の扉を開く。

男は車に乗り込むと、……懐のそれを、後部席に座っていた冷たそうな雰囲気の人に手渡す。

【小此木】「手に入れて来たんですね。お望みの、新刊とやらです」

【野村】「いつも落さないわね。……くすくす。これがFront Fieldの前原通伯とそのご子息による初の合同本なのね。うふふふ、今回もレッドゾーンぶっ千切りの、表世界では到底刊行できないような内容が楽しみだね。くすくすくす……」

【小此木】「そんなにお気に入りなんでしたら、ファンレターでも送ってやたらどうですか？ すったらんと、喜びますね。くっくく」

【野村】「……ファンレター？ この私が？ <すくすくす。………
そうねえ」

こうして後日、ペンネーム、フィールドビレッジさんから圭一は、
人生で初めてのファンレターをもらい、大喜びするのであった。

【聲音】「同人誌即売会での刺激や出会いは、時に人生さえ変えるか
らねえ。みんなも楽しく健全な同人ライフを楽しんでねっ。くれぐれ
も、準備会のルールを守ってね。地域の人たちにも迷惑をかけないよ
うねー！」

こうして部活メンバーは、仲良くそれぞれの作った同人誌を回し読
みして楽しむのだった。

ただし、圭一の本は墨塗りだらけで、話がさっぱりわからないので
あった……。

<おしまい>

「墨見沢同人誌即売会、爆催！！」

著者：竜騎士07

イラスト：れもたる

発行：07th Expansion

<https://07th-expansion.net/>

発行日：2025年6月22日

印刷所：太陽出版株式会社



雖見沢同人誌即売会、

爆催!!!

07th Expansion